

第一夜座敷童

思えば、何かと運が良かった。

出張の宿は安くなければならぬ。だからその旅館で一番の安い部屋を取った。だが、その部屋の冷房装置が壊れたと云うので別の部屋を充てがわれた。そうしたら、空いている部屋がその旅館で一番高価な部屋だと云う。一人なのに二人部屋、然も室内温泉付きとある。

これは僥倖、面倒な出張が少し楽しくなつたと意気揚々と出発する。

飛行機は、いつも窓際を取る。今回も問題なく取れた。私は毎回、ずっとずっと空を上から見るのが好きなのである。

現地に着き、チェックインを済ませ、少し休んでから仕事に向かう。部屋は大層良いものだった。心地の良い畳、迎える茶菓子と梅昆布茶。この宿に戻つて来ることすらが楽しみに思う。

そして仕事は上々だった。無理難題を吹っかけられると思つていたら、先方の偉い人に矢鱈と気に入つて貰え、とんとん拍子で商談が決まる。

今は気分よく料理に舌鼓を打ちながら日本酒と洒落込んでいる訳である。

良い感じに酔いが回つてきたのだろう、天井からキシキシガタガタと音がすることに気がついた。大方、二階の宿泊客が戻つてきて騒いでいるのだろう。

足音の感じからして大人ではない。きつと家族旅行なのだろうと微笑ましい気持ちになる。そして料理を食べ終え、温泉に浸かる。

嗚呼。久方振りにゆつくりと湯に浸かった気がする。それも温泉である。極楽極楽、と云いたくもなる。

湯から上がると、酔いは覚めているが少しの旅の影響か、眠気が襲ってきた。嗚呼、湯冷めしないうちに布団へ這入ろう。

ウトウトとなりながら布団へ向かうと、また階上の音が聞こえる。子供の足音にしても少し可笑しい気がするが、そこまで考えるほど頭も回っていない。

私は、眠りについた。

眠っている間もその音が聞こえていたのか、天井に穴が開く夢を見た。天井から何か覗いていたが、それが何かは解らなかった。

翌日は休日である。このまま帰る予定ではあったが、折角なのでもう一泊しようと云う気になつた。天井の音が気になると云うこともある。

旅館の受付に問い合わせた所、本日もこの部屋のみ空いているからそのまま泊まっても良いそうだ。更に、昨日と同じ値段で良いと云う。人が泊まる予定のない部屋だから、少し安くても誰かが泊まった方が良くと云うことなのだろう。

私はそのまま、帰りの飛行機もキャンセルをした。

さて。それは良いが、何をしようか。受付に観光案内を聞くと、近場に有名な動物園と水族館が併設したような施設があると云う。なるほど、それは面白い。私は存外、生き物を見るのが

好きなのである。

受付に頼み、タクシーを呼んでもらう。

嗚呼、今日は暑いですね。とか、関東の方から来たのですか。お土産には何々が良いですよとか、そんな話を聞きながら目的地に着く。

広い広いその施設には、カップルや家族連ればかりが群がっているが、私は気にすることを感じない。楽しめれば良いのだ。

チケットを買って、足を踏み入れる。まず目指すはイルカショウである。

その場所を探しながら歩いていると、丁度馬のミニパフォーマンスが始まると云う。まだイルカショウまでは時間がある。これ幸いと私は席に着く。

馬も好きな動物の一つである。筋肉質な体、細い足。力強い駆け足。素晴らしいと云わざるを得ない。そんな馬のショウも力強く、素晴らしいものだった。

拍手を送り、さて、イルカショウの場所を探す。あと十数分だ。席は埋まっているだろうか？ そう思いつつもステージへ行くと、丁度良い席が空いていてはないか。横からも縦からも真ん中だ。なぜこんなところがポツカリと空いているのだろうか？ まあ良い。ただの僥倖であらう。そのまま私はイルカショウを楽しむ。

イルカショウと云えば、多くはバンドウイルカによるものだ。このショウも多くのイルカはバンドウイルカであるが、なんとこのショウではオキゴンドウが芸をすると云う。バンドウイルカより一回りか二回り大きいオキゴンドウの芸は非常に見応えがあった。実に満足である。

その後、サファリエリアを周回する乗り物へは一番良い所に座れたし、滅多に見ないエンペラーペンギンが近くに寄ってきてくれてガラス一枚隔てたすぐそこで見ることができた。

キングペンギンが泳ぐ姿も見られたし、ベニフラミンゴが片足で立つて自分の羽根に顔を埋めて寝ている姿も見られた。アルビノの孔雀もいた。放し飼いに近く、ともすれば触ることもできそうだった。モモイロペリカンも間近で見られたので、あの慄くほどの大きさも体験できた。

全てが全て、運が良いとしか云えない。動物園とか水族館とかいった類は商品が生き物であるから、楽しむのには運が必要である。この上なく、運に恵まれた一日であった。

満足な気分で旅館に帰り、昨日と同様に料理に酒に舌鼓を打つ。また階上はキシキシガタガタと音が鳴る。不定期に鳴るその音を不愉快に思えない自分に不思議になりつつ、また温泉に浸かり眠りに就く。その日は歩き疲れたこともあり、ぐっすりと眠った。

夢は見なかった。

翌朝起きると、その日は階上の音がしなかった。私が起きるより前に出発したのだろうか。そう考えながら出立の準備をしていると、温泉の湧く庭からコトリと音がした。

何やら放り込まれたかと思つたが、特に異常はなく思える。何かが壊れていたら責任を取られるかも知らんが、どうも問題はなさそうだ。

もう一度確認して、私は旅館の受付へと赴いた。

「ご利用ありがとうございます。いかがでしたか？」

女将さんなのだろうか、柔らかな女性がチェックアウトの手続きをしてくださった。

「嗚呼、食事も、温泉もとても良うございました。こんな安く泊めてくださって、本当に申し訳ない限りです」

「申し訳ないも、こちらの都合でございましょう。突然、お部屋を変えさせていただきまして旅館側からしたらそうなのだろうか。いや、きつとこれは唯の商売上の口上なのだろう。」

「イエ、然し階上の部屋にご家族連れが泊まっていたのか、やや足音が響きましたな。趣ある旅館ですから、仕方がないのでしようが」

少しだけ、高い部屋だったが不便もあつた、と伝える事で安く泊まった申し訳なさを払拭しよう、私は少し意地悪なことを云つてみた。だが。

「おや、この旅館は平屋ですこと。階上は何もないですが、はて…？」

そんなことを云われてしまった。

それでは妖でも居られたか。

「お客さん、昨日もお部屋のキャンセルがあつて同じお部屋にお泊まりになられましたし、もしかしたら座敷童でも居たんですかねえ」

女将さんはウフフと笑いながらそう云つた。

「ここら辺は座敷童が有名なのですか」

どこかの地域では、座敷童が出る旅館が有名で何年も予約が取れないと聞いたことがあるが、はて、この地域だったか。

「いいええ、こちら辺は特にありませんねえ。有名どころと云えば、一つ目小僧や酒呑童子ですかねえ。まあ、何にせよ、お客さんは運が良かったかも知れません」

確かに、この数日は酷く運が良かった。

だが、所詮運は運。楽しかった、特異だったと思うが吉だ。

「兎角、ありがとうございます」

「はい、是非またいらしてください」

旅館を後にする時に、ふわりと風を感じた。振り向くと、女将さんの背後から狐の尻尾が幾本か見えた気がした。

座敷童ではなく、化け狐の類だったのかも知れぬ。

関東の自分の家に帰宅し、旅の後片付けをする。

温泉で癒されたが、矢張り旅行というものは疲れるものだ。

いつの間にか眠りに就いてしまったようだった。

ふと早朝に目が醒めると、体が動かなかった。金縛りというやつか。暫しそのままにいると、階上からキシキシガタガタと微かに聞こえた。そして、視線の隅に猫の尻尾が二尾泳ぐ。

嗚呼、憑たいて、ききて、しままつたのだな、と思おもった。